

理想の教師

1. 教育を考える一言

凡庸な教師はただ喋る
良い教師は説明する
優れた教師は自らやってみせる
しかし偉大な教師は心に火をつける

2. 背景

この言葉は、ウィリアム・アーサー・ウォード（アメリカのルイジアナ州出身の作家、学者、牧師、教師 1921 年-1994 年）によって述べられたものです。

私は高校生のときにこの言葉に出会いました。高校生のころから教師という職業に憧れていて大学を卒業したら教師になりたいと当時の担任教師と話していたときに、担任教師から教師になりたいのならこの言葉を教えていただきました。当時はこの言葉にあまり感動をしませんでしたが、大学での経験によってこの言葉の偉大さに気づきました。

3. 考察

この言葉を聞いて、教師は生徒にわかりやすく説明できれば十分だと思っていた私は2番目の良い教師であれば十分だと最初に感じました。実際自分が高校生のとき、わかりやすい説明をしてくれる教師がすきで、自分もそういう教師になりたいと思っていました。

しかし、大学で教育について学び、教育実習を経験することによって2番目の良い教師では不十分であることに気付きました。気付けた理由は、教育実習のときの指導教官のおかげでした。指導教官に授業をする上で一番重要なことは「教材研究」だと何度も言われました。最初はなぜそんなに教材研究が大切かわかりませんでした。先生方の授業を見させていただき、お話をさせていただくことでその理由がなんとなくわかりました。先生方は教科書に載っていない内容も調べ、その上でどのような授業の進め方をしたら生徒がわかりやすく、興味を持てるかなどを考えていました。教育実習をへて、自分が生徒のときには気付かなかったことに気付け、非常に有意義な経験をさせていただきました。

そこで、大学の授業や教育実習の経験などを踏まえて、私が考える理想の教師は生徒が授業内容に興味を持ち、自ら考えたいような授業をする教師だと感じました。そのように考えるようになって初めてこの言葉の偉大さに気付きました。

私が教育実習のときにこの言葉の中のどの教師であったかは自分自身ではわかりませんが、いずれ教師になったときにはこの言葉を座右の銘にし、4番目の生徒の心に火をつけられる偉大な教師を目指していきたいと思えます。

引用参考文献 下村哲夫『先生の条件 いま教師が問われていること』学陽書房、1988年